

ロシアにおける日本文学の人気は、20世紀後半から今日までの少なくとも70年間にわたり、高まる一方である。社会主義下のロシアでは、とりわけ日本古典文学が好まれていた。というのも当時は、日本の現代作品の多くは、イデオロギー上の理由で翻訳できない状態だったからである。今では、日本で有名になった価値ある新しい出版物はすぐに露訳されるようになり、翻訳者はロシアの読者に現代日本文学の雰囲気、志、スタイルの変貌やその流れをできる限り伝えようとしている。

日本語・日本文化を専門にしている原文で文学を読むロシア人は、おそらく、日本文学愛好者の中で最も優れた資格をもつ読者だと言えるであろう。今回のコンクールで、日本側からロシアの翻訳者に可能性が与えられたということ、一方ロシアからは30名もの応募があり、20代の若者が多数チャレンジしたという事実は、大変素晴らしいことだと思う。実際のところ優れた翻訳は数編あり、選考はかなり難航した。最優秀賞をエカテリーナ・コヴァリョーヴァに与えた理由は、その翻訳が2つの大きな長所をもっていたからである。私見では、コヴァリョーヴァの翻訳の第一の長所は、原文のきわめて深く詳しい検討にある。読み始めるとすぐ、それが緻密な検討の結果生まれたものであることが分かる。第二の長所は、独特なロシア語のスタイルにあり、そこには本物の文学性が感じられる。原文のスタイルの流れを把握した上で、エネルギーを放つ独特なロシア語の流れを創造することに成功していた。

次に、優秀賞の選考にあたっては、ヴェラ・ヴァリエヴァとマリア・プロホロワを選んだ。この2名の翻訳者もそれぞれ優秀な点を備えている。両者ともまず何より、原作者の個性を自分なりに伝えることを目指して努力していた。また、原文から受ける感覚を独自の方法で表現できたところにも、大きな価値があると思われる。

上記以外にも上質な翻訳が見受けられたので、奨励に値する作品として3名を選出することを提案した。他の審査委員の賛同を得ることができ、嬉しく思った。今後もこのコンクールは、ロシアの若い翻訳者・日本研究者にとって素晴らしい刺激になっていくことであろう。

リュドミーラ・エルマコーワ